ISSN 1344-5642

図書館報

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

2015. April No.178

ブックレビュー 新入生にイチ押しの1冊

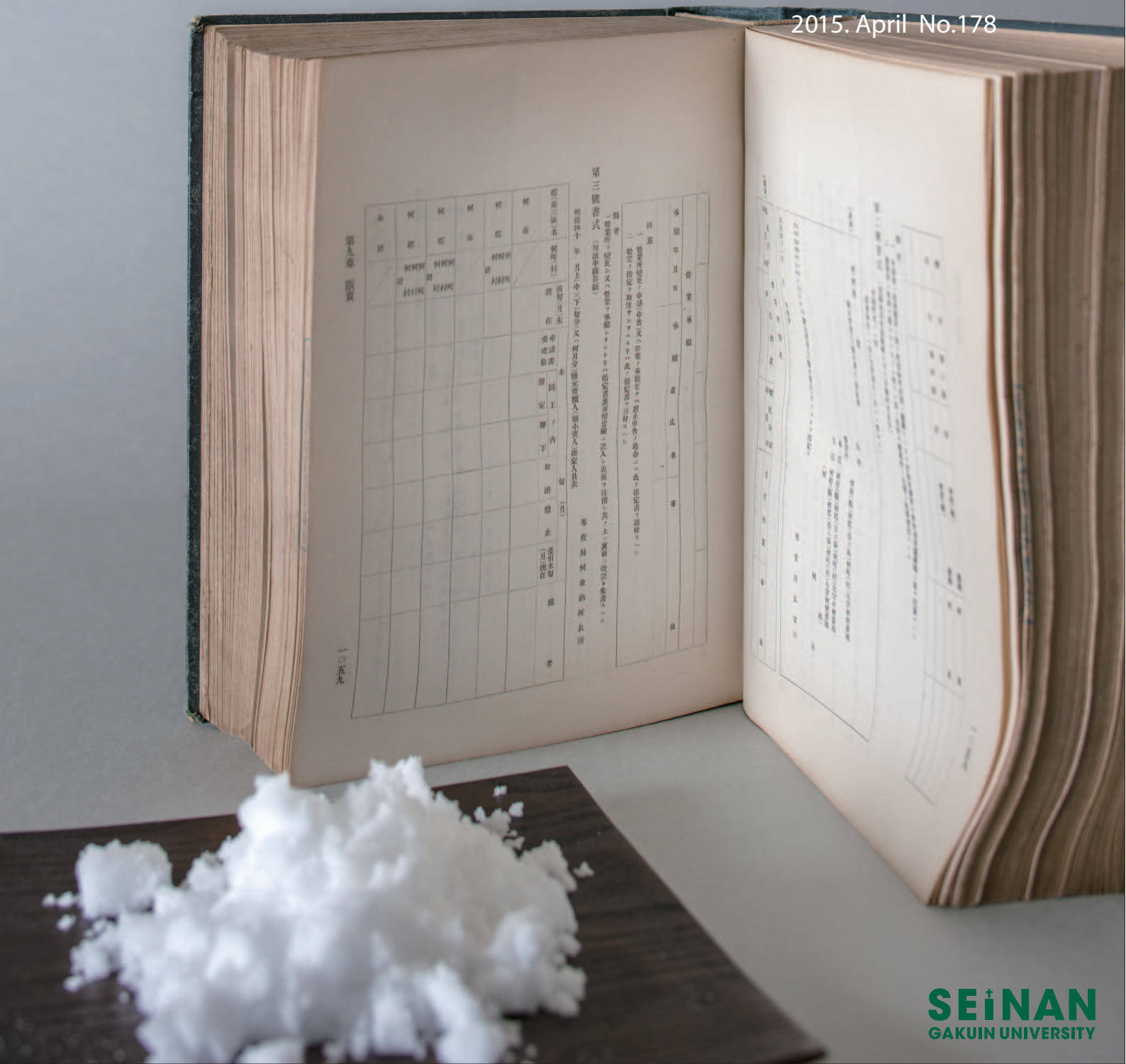
1 **仙厓逍遙(その一)**
図書館長　古田 雅憲

2 **ブックレビュー**
「西部戦線異状なし」学長 国際文化学部 教授　K. J. シャフナー
「ツァラトゥストラ」教務部長 文学部 外国語学科 フランス語専攻 教授　北垣 徹
「優雅なハリネズミ」商学部 商学科 3年　中西 巧
「乱視読者の英米短篇講義」人間科学部 社会福祉学科 3年　原賀 彩琴

3-4 **新図書館建設に向けて**
第4回 アクティブ・ラーニング実践
図書情報課　山下 大輔

5-6 **データベース紹介**
機関リポジトリ 図書情報課　坂本 里栄
OECD iLibrary 図書情報課　八尋 芙美子

7 **蔵書ギャラリー no.19**
『鹽專賣史』
経済学部 経済学科 准教授　前田 廉孝



SEINAN GAKUIN UNIVERSITY

仙厓逍遙（その一）

図書館長　古田 雅憲

「仙厓さん」こと仙厓義梵は美濃の人。禅僧として江戸時代後半に生きた(1750-1837)。その前半生を諸国行脚に多く費やしたが、39歳の春、招かれて博多を訪れ、翌年(1789)、今も博多区御供所町にある聖福寺の第123世住持となった。以後、亡くなるまでの約50年の間、常に博多の町衆とともにあった。

61歳でいったん住職を退いてから、好んで筆を執ってはたくさんの絵を描き、もって自身の修養の種とし、あるいは周庶の教化の縁とした。時に求められるままに描きもした数多くの絵の、その筆さばきの軽妙洒脱、天真爛漫なこと――今日の博多っ子も親しみを込めて「仙厓さん」と呼ぶ。

「指月布袋図」はその代表作の一つ(図版)。賛に「あの月が落たら誰にやろふかひ」とある。夜道を行く翁と二人の童とが、ぽっかり昇ってきたお月さまを見つけて大喜び。思わず天に手を伸べる翁と傍らでおねだりをする子等と――なんと微笑ましい光景、なんと美しい描線の軽やかさ、伸びやかさだろう。往時の町衆が競って仙厓さんの絵をほしがったというのも道理である。

この翁は布袋さま、画面の外遠く浮かぶ月を指さしているのだ。「指月布袋」とは禅の教訓で、「どんなに指(教典)を見つめても何もありはしない。悟りはその指のさす遠い月のようなもの」なのだとか。禅の深義はともかくも、仙厓さんの描く布袋さまを見るにつけ、ああ私もまたこんな風に無心に笑っていたいと願うばかり。

※図版…福岡市美術館蔵（石村コレクション）「指月布袋図」(9B39絵151)

そのような仙厓さんの絵と言葉とを思いつくまま訪ねてみたい――これから四回にわたり「仙厓逍遙」と題して拙文を綴ろうとする所以である。

その第一歩はやはり私たちの図書館の書庫から踏み出してみようか。

淡川康一著(1933)『博多の仙崖』(＊1)は古い蔵書の一つだ。著者は経済学者として大学の教壇にも立った人物だが、若い日に旅した博多で仙厓さんの遺風に接し、まさしく雷に撃たれたごとく虜となったのだそうだ(自序)。その文章を音読してみると良い、今から80年前のある日、31歳の青年学者の胸に宿った不思議な高揚感がよく伝わってくるから。そのような「熱」を秘めた本が静かな書庫に眠っているのを見つけ出す――書庫を散策する人のひそかな愉しみでもある。

話を元に戻そう。2F大型本コーナーには、出光美術館編(1988)『仙厓』(＊2)がある。最大の仙厓コレクションを持つ出光美術館の所蔵品図録だ。仙厓さんの絵を読み解く上で必須の資料、これを自由に閲覧できるというのはとても好都合である。

あわせて中山喜一朗(福岡市美術館)編(1986)『仙厓展―ユーモアにつつまれた禅のこころ』(＊3)があるのも有り難い。同館は仙厓さんの書画ほか96点を所蔵している――「石村コレクション」と言う。博多銘菓「鶴乃子」でおなじみの石村萬盛堂のご先代・石村善右翁が蒐集されたもの。図版で予習を済ませたら、大濠公園に散歩しがてら、実物を見に行くことにしよう。

それから辻惟雄編(1979)『江戸の宗教美術：円空・木喰/白隠・仙厓/良寛』(＊4)があった。日本美術研究の泰斗による「仙厓論」を学ぶことができる。仙厓さんを訪ねるにあたってはまず見ておきたい一書である。

また外国語で書かれた「仙厓論」もある。Daisetz Suzuki(2005) “Sengaï : le rire, l'humour et le silence du Zen”(＊5)とShokin Furuta(2000)“Sengai : master Zen painter”(＊6)の二書だ。海外からいらした皆さんにも仙厓さんを身近に感じていただけるなら嬉しい。近代日本最高の禅研究者である鈴木大拙翁と古田紹欽師は、仙厓さんについてどのように語ってくださるのだろうか。(両書には日本語版もある。)

この他、仙厓さんの生涯や逸話を上手にまとめた資料も数冊ある。衛藤吉則他(1998)『仙厓』(＊7)，石村善右(2007)『仙厓百話』(＊8)など。基礎的な知識はこれらで仕入れることができそうだ。

さてさて、これらの資料を最初の手掛かりに、ぼちぼち仙厓さんの足跡をたどってゆくことにしようか。

[附記]

この春から図書館長の任を仰せつかりました。微力ですが、少しでも皆さんのお役に立つよう誠実に務めたいと願っています。お力添えのほど、どうぞよろしくお願いいたします。

参考文献

(＊1)淡川康一著『博多の仙崖』高尾彦四郎，1933 (閉架(5階神学部) SAN/188/35)
(＊2)出光美術館編『仙厓』出光美術館，1988 (大型本(開架2階) 721/7/18)
(＊3)中山喜一朗(福岡市美術館)編『仙厓展：ユーモアにつつまれた禅のこころ』福岡市美術館，1986 (開架4階 721/7/20)
(＊4)辻惟雄編『江戸の宗教美術：円空・木喰/白隠・仙厓/良寛』学習研究社，1979 (大型本(開架2階) 708/0/46-23)
(＊5) Daisetz Suzuki “Sengaï : le rire, l'humour et le silence du Zen” Courrier du Livre,2005 (閉架(7層) 721/7/5)
(＊6) Shokin Furuta “Sengai : master Zen painter” Kodansha International ,2000 (閉架(7層) 721/7/3)
(＊7)衛藤吉則，石上敏，村中哲夫共著『仙厓』西日本人物誌8，西日本新聞社,1998 (開架2階 281/08/28-8)
(＊8)石村善右著『仙厓百話』石風社，2007 (開架2階 188/82/66)

ブックレビュー　新入生にイチ押しの1冊

『西部戦線異状なし』

(世界文學全集 第1期 25巻)
エリッヒ・マリア・レマルク著
河出書房 1954年
(閉架(7層) 943/R2/1)
学長
国際文化学部 教授
K. J. シャフナー

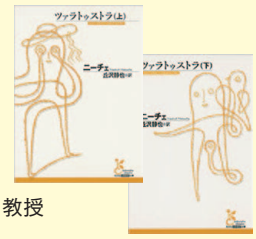
私が大学2年生の時に必修科目「西洋文明」のために読んだ本を紹介しようと思います。本棚に残っていたのは次の一冊しかありませんでした―All Quiet on the Western Front(『西部戦線異状なし』)。この1928年に出版された小説はドイツ人作家エーリッヒ・マリア・レマルクの第一次世界大戦の実経験に基づいているものです。

語り手はパウロ・ボイメルという18歳の青年で、学校の先生の勧めによって級友と一緒にドイツ軍へ入隊します。彼の戦場の生々しい描き方や兵士の心理的変化の語り方は戦争の苦悩や恐怖について考えさせられます。若い青年たちの悩み、友情や将来に対する希望も描かれています。

この小説はドイツだけではなく世界的に反響を呼んだ作品ですが、1933年にナチスにより焚書の処分を受けました。1930年にアメリカでは映画化されていました。主演であったルー・エアーズは第二次世界大戦が勃発したときに、映画で出演した経験から良心的兵役拒否者と宣言し、銃を持たない看護兵として志願しました。

今回この本を読みなおしたときに、大学の仲間が経験したベトナム戦争や父が19歳で経験した沖縄戦を思い浮べました。「平和ボケ」と呼ばれる今の時代に生きる皆さんに読んでほしい一冊です。

『ツァラトゥストラ』



ニーチェ著
光文社 2010-2011年
(閉架2階 134/9N71/61-1～2)
教務部長
文学部 外国語学科 フランス語専攻 教授
北垣 徹

人生、このときにはこうすべき、というのはやはりあって、大学生のときにこそ、すべきことがある。そのひとつが読書だが、どんな本を読んでもいいわけではない。「大学生の時にこそ読むべき本」というのがある。

それはどういう本かといえば、聖書、ないしは聖書に似た本である。つまり、分かる分からないに関わらず読む本だ。分かる、より、変わる、が大事で、読んで自分が変わる本。何らかの刺激や衝撃をもたらし、身も心も動かす本。繰り返し読む本(一日の内に何度となく、人生の内で折りに触れて)。

私はクリスチャンではないので、聖書に似た本のなかからオススメをひとつ。『ツァラトゥストラはかく語りき――これは、みんなのための本であり、誰のための本でもない』。実際、私は本書を、まず大学生のときに読み、最近また読み返した。このように、人生の先になって読み返すであろう本を、大学生の内に読んでおかねばならないのだ。これまでだと早すぎたし、もっと年をとってからだと遅すぎる。「若気の至り」で読んでみようと思わせるくらいの本が、ちょうどいい。今はわけが分からずとも、人生のまた別の瞬間になって立ち戻ってくる気にさせる本を、あなた方は今、手にしなければならない。

『優雅なハリネズミ』

ミュリエル・バルベリ著
早川書房 2008年
(開架4階 953/B21/3)
商学部 商学科 3年
中西 巧

「優雅なハリネズミ」は、高級住宅街にあるアパルトマンで管理人をしている未亡人ルネと、そこで家族と暮らしている少女パロマが語り手の小説です。管理人ルネは豊かな教養を身に付けた女性で、パロマはずば抜けて賢い少女です。ですが、ルネは敢えて自分が無教養な人間であると周囲に認識させるように振る舞います。そして、パロマは人生を悲観して自殺願望をもっているのです。そんな二人の前に日本人紳士オヅが現れてから、二人がどう変わってくのか。このようなあらすじとなっています。

作品中には数多くの日本に関係のある映画や俳句そして漫画が登場します。ここから著者の日本文化への造詣の深さがうかがえます。普段は日本映画や漫画に触れることが多い方にはぴったりな作品で、みなさんが知っている作品を作中で見つけてうれしい気持ちになるかもしれません。そして、みなさんが知らなかった「優雅なハリネズミ」に登場する作品たちに触れてから再読すると、内容の理解が深まり、「優雅なハリネズミ」のおもしろさに嵌ってしまうかもしれません。これから本をたくさん読もうと思っている方や、普段は海外小説を読まない方にお勧めの一冊です。ぜひ、読んでみてください。

『乱視読者の英米短篇講義』

若島正著
研究社 2003年
(閉架(7層) 933/0/73)
人間科学部 社会福祉学科 3年
原賀 彩琴

大学生活といえば、その中心にはどうしても講義がある。けれどサークルやバイトに忙しい皆さんへしっかり勉強に励めだなんて言いたいわけではないし、私のような怠惰な学生としても講義より先生の余談を聴くのが好きだ。この性格は昔からで、小学生の頃はいつも余談だけで授業が終わってくれと願っていた。小学校でも大学でもなかなかその夢は叶わないが、この本の中の講義は少し違う。自分の講義は「余談を講義と称してしゃべっているような気がする」とも言う著者が、好きな本を好きなように語っている素敵な“余談”がたっぷり詰まった講義なのだ。取り上げられている作品も教科書に載るような超定番の作家の作品はまず無く、著者が読んで思い入れのある本、本当に面白かった本ばかりである。だからこそお勉強的なブックガイドとは一線を画するし、読者である私たちもますます本を読みたくなる。おしゃべりで本好きな友人を一人増やす気分でお手にとっていただければと思う。

新図書館建設に向けて

第四回

「アクティブ・ラーニング実践」

（図書情報課 山下 大輔）

1. はじめに

新図書館では、これまでの図書館では無いいくつかの試みが行われることになります。それは、大きく分ければ、以下の三つのカテゴリーにより提供され、総括してアクティブ・ラーニングと呼ばれる学びが展開されることを、目指したものです。

① 各種サポートの提供（ライティング、IT、レファレンス）
② グループ学習エリアの設置（グループ学習室、ディスカッションスペース）
③ 発表エリアの設置（プレゼンテーションスペース、展示スペース）

当然のことですが、これらの新しい取り組みと、学内で展開される講義を中心とした学びとの連動が必須であることは、疑いの余地がありません。新図書館建設を契機として、多くの学びが、学内で見えるようになり、取組が有機的結合を目指すきっかけとなるように運用していきます。

まずは、具体的に、各取組を紹介していきます。

2. アクティブ・ラーニングを支える仕組み

① 各種サポートの提供

これまで学内で分散して提供されてきたサポートを一元的に提供し、さらに充実させていくことを目標としています。特にライティングサポートについては、現在の図書館で提供されているチューター制度を発展的に展開します。レポートの作成、論文の執筆、ディスカッションの準備、ディベートの支援等、幅広いサポートを展開すると共に、サポートチームによる、論文講座等のガイダンスや、サポート資料の作成、オンラインでのサポート等を展開していきます。様々な課題を持った学生が、アドバイスを求めることが可能なワンストップサービスとなる予定です。授業の課題が分からない時、レポートが書けない時、じっくりと論文執筆の相談がしたい時、様々な局面で活用出来るようになります。アドバイザーには、現在のチューター制度と同様に、幅広く学生スタッフを活用する予定ですが、学生アドバイザーの質を保ち、的確なサービスが提供出来るような体制についても、これから具体的に検討していくことになります。図書館だけでなく、各学部、他部署とも連携しながら、サービスを構築していく予定です。

また、ITサポートスペースに展開されているエリアについては、IT機器の利用方法に留まらず、グループ学習環境全般に対するアドバイスを提供していきたいと考えています。資料の作成に、IT機器がどのように活用していけるのか、どのツールを利用すれば、効率的な作業が可能になるのか、幅広いアドバイスを提供します。現在、図書館では、辞書、法律、統計、企業、新聞、雑誌論文検索等様々な分野のデータベースを提供し、さらに、文献管理ソフト等のツール類も整備しています。しかしながら、これらに関するサポートは不十分な状況ですので、一体的に活用が可能なサポートを併せて提供します。

そして、レファレンスサービスについては、これまでの図書館で提供していた資料案内等の伝統的な内容に加えて、これらの各種サポートを統括するような位置づけで発展させていきます。幅広いサポートには、学内の複数の部署が関連し、多くの学生スタッフを活用することになるでしょう。また、外部のデータベース業者等にも協力を求めていくことになります。これらを、取りまとめていく役割がこれからの図書館には、必要になってくることになります。

② グループ学習エリアの設置

現在の図書館は、静かに学習することを基本に設計されています。新図書館では、用途に合わせて、自由にグループ活動が可能なエリアを低層階に設定します。予約した上で、利用するグループ学習室もありますが、特に予約することなく、自由にディスカッションが出来るスペースが誕生します。

現在でも、学生ホール、学外のカフェ等で様々な議論を行っている方もおられると思います。しかし、学内にオンラインで提供されているリソースを含めて、図書館の様々な資料、サポートを活用しながら、グループ学習が可能な環境が整備されることで、授業内での知識修得、個人での学習の延長線上に、グループ学習が行われ、活動が見えるようになります。もちろん、ホワイトボード、ノートPC、プロジェクター、電子黒板等の備品も整備する予定です。これらを、活用しながら、議論を深めていってください。

グループ学習室も、室数が増加します。これまで以上に、グループ、ゼミ、授業での利用か可能です。より、落ち着いた環境で、体系だった利用が可能です。

③ 発表エリアの設置

学内で展開されている、様々な学習成果を、オープンに発表する場を提供します。これまで、あまり目にすることが無かった他学部の成果も、より見えるようになり、授業以外の活動についても、体験を共有出来るようになります。

プレゼンテーションスペースでは、ゼミ発表等の講義による利用はもちろんのこと、学生団体によるイベント、大学主催のイベント、様々な利用を想定しています。日替わりでの発表や、各種イベントも企画していきます。現在のチャペルのような形式で、日々学習成果が発表されていく方式もよいのではないかと考えています。また、展示スペースでは、作品、記録、成果等の各種成果物を順次展示していきます。いずれにしても、学内で起こる何かを出来る限りオープンに自由に、興味を持ってもらえるようなスペースにしていく予定です。

そして、これらの成果については、随時機関リポジトリ等を活用して、世界へ発信していくと共に、次の世代が活用していくためのアーカイブとして保存していきます。

3. 期待される展開

新図書館が、学習成果が発表される場となり、多くの取組、日々の活動が見えるようになることで、各活動が他学部へも波及していくことが必要になってきます。現在でも、学内教育IP等により、多くの取り組みが展開されています。施設、設備が整い、サポート体制が充実することにより、西南学院大学総体としての、教育活動が、より強固なものになるのではないでしょうか。

自ら考え、アウトプットすることを経験し、そのために必要な学びを自ら選択し、他者との関係を構築し、生涯成長してくことが出来る人材を輩出していく。新図書館が、そのことの象徴となるような運営を行っていく予定です。

このようなスペースが新図書館に誕生することにより、授業においても、現在も一部で展開されているプロジェクトベースドラーニングや、プロブレムベースドラーニングのような参加型の講義が、より学内でも積極的に展開されるようになり、全学部的に体験出来るようになるようになるでしょうか。そして、日常的なディスカッション、プレゼンテーション、発表が新図書館で共有され、実質的な学びの中心となっていくことを目指しています。

現在でも、日々更新されていく、新しい取り組みに、常に図書館が関わっていくことが出来る体制整備が必要なことが課題であると感じており、新図書館をきっかけに、より充実した運用体制を考えていきたいと思います。

4. 新図書館へ向けて

新図書館は、2015年度に着工する予定ですが、現在の図書館職員を中心として、関係者による幅広い先行事例調査を実施しています。私自身も、昨年度、海外研修制度を利用して、2ヶ月弱の間、アメリカ東海岸及び韓国を訪問する機会をいただきました。特に、今回紹介したアクティブ・ラーニングについては、注目して調査、研究を行ってきました。

多くの先行事例を見る中で、ラーニング・コモンズのような施設面の視察等もさることながら、各種施設を運営する職員の立場や気持ちの変化を感じ取ることに、意義を見出せたように感じました。多くの図書館で、様々なサポートが展開されていましたが、それらを取りまとめているのは、大学内で提供されている、各種リソースを取りまとめ、調整し、運用することが出来るライブラリアンでした。今後、具体的なサービスプランが検討されていくことになりますが、より有意義な形での実現を目指していきたいと考えています。

最後に、アメリカで印象に残った図書館を二つ紹介しておきたいと思います。

---

① Simmons College Beatley Library
（マサチューセッツ州、ボストン）

1階にPCを配置した、ラーニング・コモンズ及びサポートデスク、ライティングセンター、レファレンスデスク、貸出・返却カウンター及び、サブジェクトライブラリアンの対応個室があります。また、地下には、チュータリングセンターが配置されています。レファレンスデスクが、総合受付カウンターの役割を担っており、必要に応じて、各種サービスを手配します。学生スタッフも多く雇用されており、図書館の中での総合的なサポート体制が整備されています。本学図書館の目指すサービス形態に近い図書館です。

（参考）
http://www2.simmons.edu/library/

② New York University Bobst Library
（ニューヨーク州、ニューヨーク）

非常に大規模な図書館ですが、常に、新しい方向を見てリノベーションを行っています。直近では、図書館内部の書架を大幅に減少させ、グループ学習のためのスペースの確保を行っています。多くの学生が、ディスカッション、グループワークを行っていることが印象的でした。

（参考）
http://guides.nyu.edu/friendly.php?s=researchcommons

---

5. おわりに

新図書館では、各種サポート施設を、新図書館内へかなり集約していくことになります。授業との連携を視野に入れたサービス展開を行うことを目標として、現在鋭意細部の検討を開始しています。現在国内の図書館は、新築、改築ラッシュです。そして、その目玉は、やはりアクティブ・ラーニングです。しかしながら、実際に活用され、「学ぶこと」の成果がしっかりと出ている図書館は少数であるように感じます。本学の図書館が、より実質的な学びを展開できる場所となるように、これから、しっかりと検討していきたいと考えております。

利用者の皆様からの、ご要望も随時お待ちしております。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

DATABASE

データベース紹介

「機関リポジトリ」は教育・研究成果の発信手段として大学や研究機関等が作成・提供しているデータベースです。今回は昨年秋に誕生した「西南学院大学 機関リポジトリ」と、研究でよく利用されている「OECD iLibrary」をあわせて紹介します。データベースがたくさんありますが、それぞれ探せる内容(コンテンツ)と検索機能を知っておけば、必要なときに皆さんのお役に立つものばかりです。ぜひこれを機会にアクセスしてみてください。

機関リポジトリ

図書情報課 坂本 里栄

アクセス方法 ： 西南学院大学 機関リポジトリ http://repository.seinan-gu.ac.jp/

機関リポジトリ(以下、リポジトリ)を紹介するにあたり、まずは、私の妄想小話をご覧ください。

図書館職員Dがとある古い論集を確認していた。大学近辺に固有で生息する生物を長らく研究していたA先生の論文がそこにはあった。数多くの研究成果が残されていたが、学内の研究紀要を中心に発表されていた。この論文群をリポジトリに載せよう。図書館職員Dが動き出した。

研究者Aは、百道浜に生息する固有種ニシナンアルキを長年に渡り観察してきた。

この成果群が、リポジトリに掲載されたことにより、日本はもとより、世界各国の研究者から注目され、長年の研究生活で蓄積したその記録は、ニホンアルキやアメリカアルキへの応用に期待が寄せられるようになった。ニシナンアルキは実に300種類に派生し世界的にも稀有な生態系を創出していることが、判明したのである。

これは、図書館員坂本の妄想によるフィクションですが、同様にリポジトリへの掲載で世界的に注目された事例が他大学でも実際に発生しています。

リポジトリは教育・研究成果発表の場を提供するウェブツールです。リポジトリへ研究成果を登録することにより、研究が注目され、活用されることで大学としての社会的責任を果たすことに繋がるのはもちろんのこと、研究者にとっては、ロングテールな引用、共同研究への発展に繋がったりします。そして、時には過去の研究成果が再発見され、世界的な評価へと繋がることもあります。こつこつとセルフアーカイブしていくことで業績リストとしての活用も可能です。

古い論文は不備があったり、未熟な部分があったりで、恥ずかしいという意見もお伺いしますが、そこは、研究の成長の記録ということで、後進の育成のためにもご理解いただきたいのですが、いかがでしょうか。

学術雑誌の購読料は年々高騰しています。加えて、近年は為替変動の影響もあり、毎年購読料の確保に奔走しているなか、購読料が確保できない大学も出てきています。私も、ここ数年を振り返ると購読料の高騰に振り回され、まるで見えない何かに踊らされているような、見えない檻に囚われているような先の見えない状況にあるように感じています。

最新の研究成果を知るには、雑誌は必須であることは誰もが同意してくれることと思います。しかし、購読料を確保できない大学の研究者は、研究成果の情報収集で遅れをとることとなります。読めない大学の先生も残念ですが、読んでもらえない執筆者も不利益があります。世の中に知ってもらえなければ、それは無かったも同じですから。リポジトリを活用することが、研究成果へのアクセシビリティ向上にもつながります。購読料などの外的要因に影響されずに、より多くの人に成果を知ってもらうことができるのです。

また、研究成果の発表の場としては、学位規則の改正で博士論文の掲載が義務化されて以後、急速に社会的認知度が上がっています。しかし、教育成果を公表するプラットフォームとしては、これからです。リポジトリは今後大学の教育・研究を総合的に広報するショーケースとして発展していくことも期待されています。

西南学院大学も2014年10月にリポジトリを公開しました。日本のリポジトリの歴史は10年以上前まで遡ることができます。それに比べ、公開したばかりの本学のリポジトリは、運用開始したばかりの赤ちゃんリポジトリです。

リポジトリの理念が浸透し、発展することにより我々のリポジトリからも嬉しい再発見があることを、期待しながら、今日も新しい研究成果を登録していきます。

OECD iLibrary

図書情報課 八尋 芙美子

アクセス方法 ： 図書館HP＞データベース＞テーマから探す：国際協力＞OECD iLibrary

OECD(経済協力開発機構)を知らない人はいないでしょう。しかし、ニュース、新聞、本でよく見かける、OECDの出版物や統計データが学内から手軽に入手できることを知っている人はどれぐらいいるでしょうか。今回は、そのOECDの情報を入手できる「OECD iLibrary」について紹介します。

OECD iLibraryはOECDおよびIEA(国際エネルギー機関)、NEA(原子力機関)、OECD Development Centre(OECD開発センター)、PISA(生徒の学習到達度国際調査プログラム)、ITF(国際交通フォーラム)、が発行する報告書、単行本、ジャーナル(1998年以降)と統計データ(最長1960年以降まで)を収録しているデータベースです。

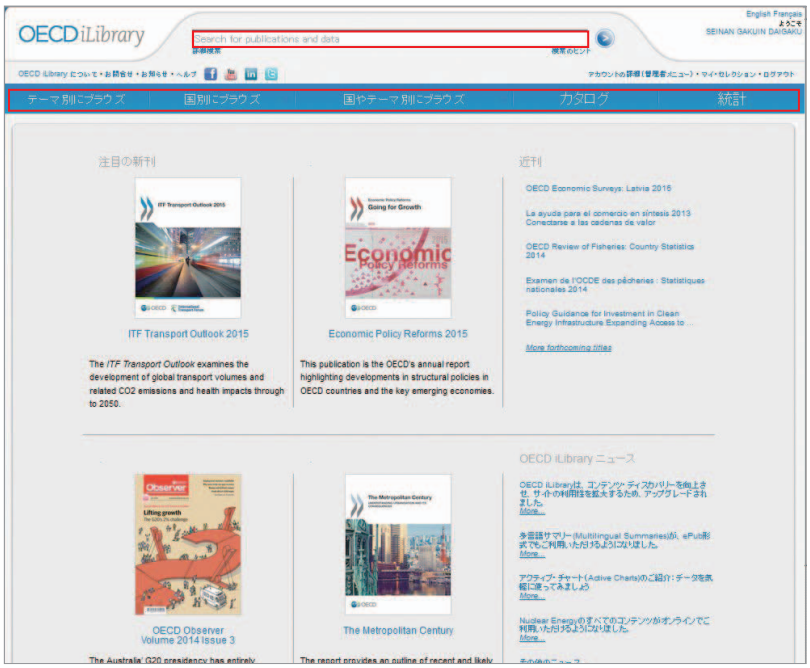
なんといっても魅力なのは、OECDの豊富な研究成果と経験をまとめた報告書等や、加盟国だけでなく主要な非加盟国から集められた統計データです。そのジャンルは農業・漁業・食品、開発援助、経済、教育、雇用、エネルギー、環境、金融・投資、ガバナンス、産業・サービス、原子力、科学・技術、社会問題/移民/保健、税制、貿易、運輸・交通、都市・農村・地域開発と多岐にわたっています。それらの情報が、OECD iLibraryを使えば、簡単に早く入手できるのです。

OECD iLibraryのトップページ(図1)はシンプルでわかりやすいです。探している内容にあわせて、キーワード検索やメニュー検索を使い分けられるようになっています。まず、画面上部にキーワード検索ができる検索窓があり、その下には、テーマや国別、出版物の種類別、統計データと、探している目的の情報別のメニューが並んでいます。そして、各資料のページ(図2)では、内容がPDF、READ、WEB、XLS、DATA等の内容にあった形式で提供されています。特に、2007年以降の報告書等に掲載されている表やグラフは元データの数値をExcelでダウンロードすることも可能です(ただし、OECDの出版物に限る)。

よく利用されている、経済学部の河村朗先生に、普段どのように利用されているかを伺ったところ、専門のエネルギー分野に関連したIEAの報告書や統計データを特に研究の際に参照されているとのことでした。また、便利な点を尋ねたところ、「一番は、最新版の資料が発行されてすぐ入手できるところ」(例：『World Energy Outlook 2014』は、2014年11月12日に発表されましたが、翌日にはOECD iLibraryで利用できるようになっていました)、そして、「電子ファイルなので、資料の中を探したいキーワードで検索できるところ」と言われていました。

世界の状況を分析した豊富な情報がいち早く簡単に入手できるOECD iLibrary。学生の皆さんにも卒論やゼミ論だけでなく、授業での課題の際にもぜひ活用していただきたいです。

(図1)



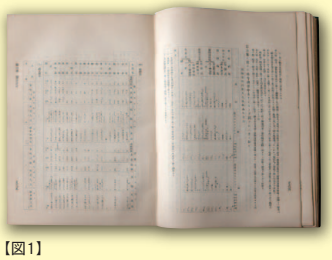
(図2)

蔵書ギャラリー no.19

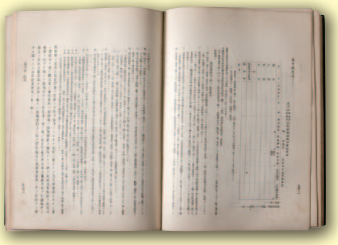
経済学部 経済学科 准教授 前田 廉孝

『鹽専賣史』専賣局編

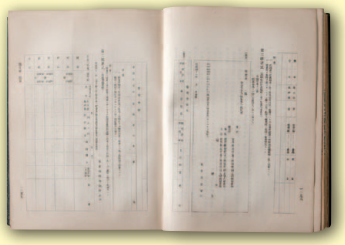
［閉架（6層）669/021/4］



【図1】
統計（製塩市町村数, 人員, 場数及生産高（1907-09年））



【図2】
通達（専売局販売部長通牒丁第三七五八号（1909年6月7日））



【図3】
書式（塩元売捌人指定ニ関スル調書（1908年5月14日））

筆者が専攻する日本経済史・経営史のみならず、歴史学的な手法を用いた研究分野においては1次史料の調査・収集が第一義的に重要視され、筆者も国内・海外で調査・収集活動を実施してきた。その際に旧家を訪問することもあるが、当主から「この資料は価値があるものでしょうか。」との質問をされることがある。多くの場合にここでの「価値」とは、より端的に表現すれば「金銭的価値」、すなわち「いくらでしょうか。」ということである。筆者は、「お宝」を鑑定する某番組に出演するような古物商ではないことから毎回のように返答に窮するが、おそらく希少性が高ければ金銭的価値は高いであろう。この推論が正しければ、今回紹介する『塩専売史』の金銭的価値はそれほど高くないと考えられる。

『塩専売史』の希少性が低い理由は、第1に国立国会図書館デジタルコレクション（NDL-DC）で閲覧が可能であり、第2に国内で所蔵する大学図書館が21館にも上るからである（CiNii Books）。このように希少性は低いが、それにも関わらず本資料の現物を所蔵することの意義は大きい。総頁数が2,227に及ぶ本資料は、NDL-DCを利用するより、目次と本文との間を即座に往復可能な現物を利用した方が遙かにスムーズに閲覧できよう。

1915年に発刊された本資料は、1905年の塩専売制度導入へ至る過程から1913年までの同制度運用過程について記されている。本資料の特筆すべき点は、塩専売制度に関する諸統計（図1）、大蔵省内の通達（図2）、官吏が業務に使用した書式（図3）などまで掲載され、『史料集』としての役割を果たしうる点にある。『日本塩業史』（日本専売公社, 1958年）が、古代から戦時期までを対象としたにも関わらず990頁であったのに対し、本資料の総頁数がその2.2倍にも及んでいるのは豊富な史料を含んでいるためである。しかし、研究を進める際に本資料に多くを依存することは必ずしも望ましくないと考えられる。

1977年に原朗氏（東京大学）は、大蔵省作成の資料を用いた財政史研究を「色濃く官撰史的性格を帯びざるを得ない」（「財政・金融」中村隆英・伊藤隆編『近代日本研究入門』東京大学出版会, 1977年, 255頁）と批判した。したがって、大蔵省が作成した本資料により研究を進める際にも、原氏の批判は常に考慮されるべきであろう。幸いなことに、1970年代に『日本塩業大系』編纂事業を進めた日本専売公社は、全国の製塩業、塩専売制度関連の史資料を調査し、収集した史資料は公益財団法人 塩事業センター（神奈川県小田原市）に継承されている。また、製塩業は全国で営まれ、例えば福岡県内の一大生産地であった津屋崎町（現・福津市）の製塩業に関する史料は『津屋崎町史 資料編 上巻』（津屋崎町, 1996年）に所収されている。このように製塩業と塩専売制度に関する史資料は全国で豊富に残され、それらと併用することによってこそ本資料の基礎的資料としての学術的価値が発揮されることとなろう。

文系の学問分野においてオンラインジャーナル、データベースなども含めた図書館の充実度は、そこでの研究・教育の質を決定的に左右する。「金銭的価値」は低いものの「学術的価値」は高い本資料を新規購入した本学図書館が、文系大学としての本学における役割を十全に果たしていることへ感謝すると共に、さらなる充実を期待したい。

参考文献
『日本塩業史』日本専売公社編, 日本専売公社,1958（閉架(6層) 669/021/7）
『近代日本研究入門』中村隆英, 伊藤隆 編, 東京大学出版会,1977（開架2階 210/6/78）

編集後記

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。既に図書館をご利用でしょうか。

今号の蔵書ギャラリーでは、塩専売制度の歴史がつづられた『鹽專賣史』という資料を取り上げました。塩というと、聖書には「地の塩」（マタイによる福音書 5章13節）という言葉があります。塩は人が生きていくうえで、なくてはならないものの一つです。皆さんにとっての塩とは何でしょうか。新入生にイチ押しの1冊の記事では先生や先輩方に皆さんの「地の塩」となる本を紹介してもらいました。図書館には、紙面で紹介した資料のほかにも沢山の知が集まっています。大学生活や図書館での出会いと経験を通して、皆さんもぴりりと味のある「地の塩」になって欲しいと思います。（R.S.）

西南学院大学図書館報 No.178
2015（平成27）年4月30日発行
編集 図書館報編集委員会
発行 西南学院大学図書館
〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号
TEL（092）823-3426
http://www.seinan-gu.ac.jp/library/
図書館報バックナンバー（No.153～）も上記サイトに掲載しています。

西南学院大学
一粒の麦から、次の100年に向かって
Thanks and Next! since1916